

長岡市文化財調査報告書

第53冊

2009

長岡市教育委員会

編集 財團法人 長岡市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第53冊

2009

長岡京市教育委員会

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

長岡市は深い歴史に抱かれた街であり、埋蔵文化財をはじめ多数の貴重な文化財を有しています。本市教育委員会では昨年の10月から11月にかけて、第一回企画展「古文書からみた江戸時代の浄土谷村」を開催し、多数の来場者をお迎えすることができました。この企画展に際しては、財団法人長岡市埋蔵文化財センターも秋季特別展を併設し江戸時代の出土遺物や写真パネルなどを展示しました。このように、埋蔵文化財に限らず古文書や民俗資料などを一堂に会し、より広い意味での「文化財」として市民の皆さんにご覧いただくことが重要であると考えています。また、今回のように対象地域を設けて皆さんにより親しみを感じていただく工夫や、調査成果を地域に還元する取り組みなどを積極的に行うことで、全体として長岡市の文化財行政を盛り立て発展させていくことができるものと考えています。

本書では、市域中央部の天神地区で前年度国庫補助事業として行った発掘調査と、北部域にあたる井ノ内地区において平成20年度の国庫補助事業として行った発掘調査の結果をまとめました。後者の井ノ内地区の発掘調査地は南側に角宮神社があり、北側では長岡京期の大規模な建物などが発見されています。井ノ内遺跡や長岡京跡を解明する上で重要な地域であり、発掘調査成果を遺跡の保護に役立てていきたいと思います。また、今後は周辺の調査成果を含めた井ノ内地域の歴史教材や資料の作成など、より有効に活用していく方法を模索していきたいと考えています。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご協力をいただきました土地所有者の方や近隣の皆様方、ご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

平成21年3月

長岡市教育委員会

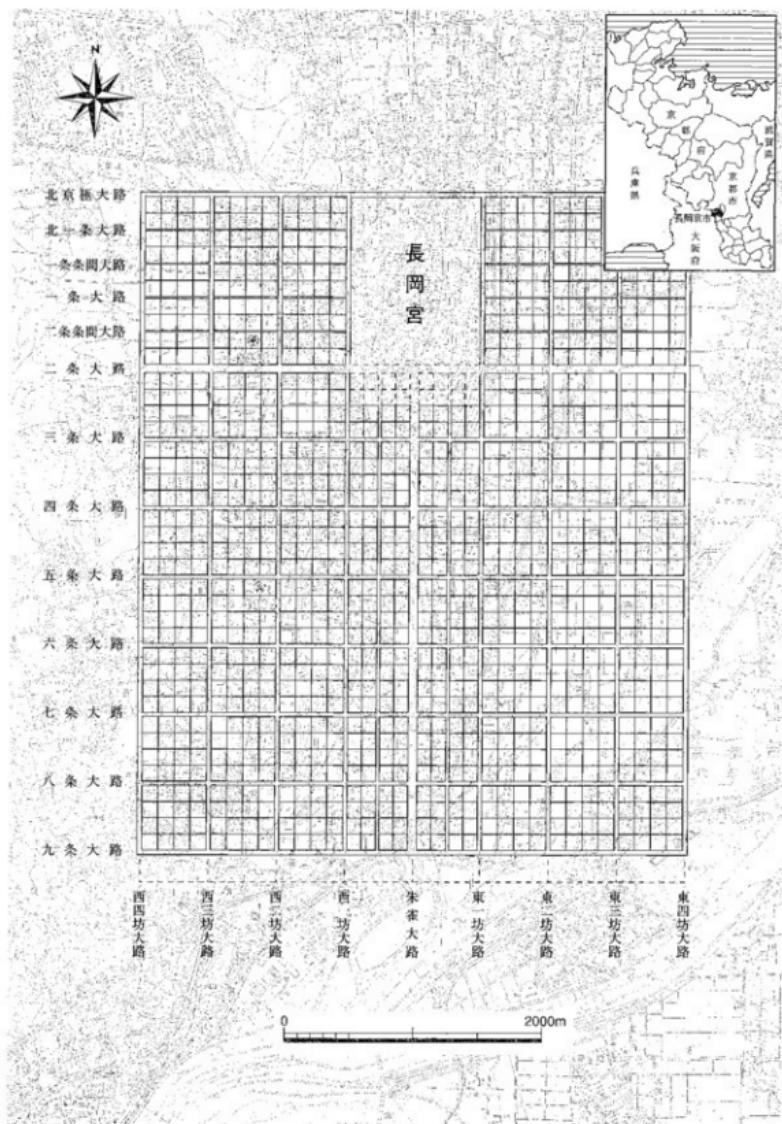
教育長 芦田富男

凡　　例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成19年度に国庫補助事業として実施した長岡京跡右京第932次調査と平成20年度に国庫補助事業として実施した右京第948次調査の概要報告である。調査対象地は第1図、付表1に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、宮城、右京城、左京城にそれぞれ分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
3. 長岡京の条坊名称は、山中草「古代条坊制論」「考古学研究」第38巻第4号の復原に従った。
4. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、「長岡市埋蔵文化財調査報告書」第2集（1985年）に従って略記した。
5. 長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数+番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。
6. 本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』（1997年版）を参考にした。
7. 本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとづいたものである。
8. 本書は、第1章長岡京跡右京第932次調査概要を山本輝雄が、第2章長岡京跡右京第948次調査概要を岩崎誠が執筆し、全体の編集は山本が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	現地調査期間	調査面積	備 考
長岡京跡右京 第932次	7ANKNZ-13	長岡京市天神一丁目37-3	2008年1月15日 ↓ 2008年2月7日	60m ²	開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京 第948次	7ANGKC-1	長岡京市井ノ内東ノ口9	2008年6月23日 ↓ 2008年9月9日	400m ²	井ノ内遺跡



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

第1章 長岡京跡右京第932次（7 A N K N Z - 13地区）調査概要

1	はじめに	1
2	調査経過	1
3	検出遺構	3
4	出土遺物	7
5	まとめ	10

第2章 長岡京跡右京第948次（7 A N G K C - 1 地区）調査概要

1	はじめに	11
2	調査経過	12
3	検出遺構	15
4	出土遺物	19
5	まとめ	20

図 版 目 次

長岡京跡右京第932次調査

- 図版1 (1) 上層遺構全景（東から）
 (2) 上層遺構全景（西から）
- 図版2 (1) 土坑S K03全景（北から）
 (2) 土坑S K02全景（南から）
- 図版3 (1) 下層遺構全景（北東から）
 (2) 下層遺構全景（西から）
- 図版4 (1) 西三坊坊間東小路全景（北から）
 (2) 東側溝S D08全景（北から）
 (3) 西側溝S D10全景（北から）
- 図版5 出土遺物

長岡京跡右京第948次調査

- 図版6 (1) 東調査区全景（北西から）
 (2) 西南調査区全景（北から）
- 図版7 (1) 西北調査区全景（北から）
 (2) 堀立柱建物S B15全景（北から）
- 図版8 (1) 溝S D05全景（南から）
 (2) 出土遺物－1
 (3) 出土遺物－2

挿 図 目 次

第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000) iii

長岡京跡右京第932次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 調査前風景 (北東から)	2
第4図 調査作業風景 (西から)	2
第5図 調査区土層図 (1/50)	4
第6図 検出遺構図 (1/100)	5
第7図 土坑実測図 (1/40)	6
第8図 近世・中世の遺物実測図 (1/4)	8
第9図 長岡京期の遺物実測図 (1/4)	9
第10図 古墳・弥生時代の遺物実測図 (1/4)	10

長岡京跡右京第948次調査

第11図 発掘調査地位置図 (1/5000)	11
第12図 検出遺構図 (1/200)	13
第13図 東調査区遺構変遷図 (1/200)	14
第14図 溝 S D05実測図 (1/50)	15
第15図 西調査区遺構変遷図 (1/200)	16
第16図 掘立柱建物 S B15実測図 (1/50)	18
第17図 炭灰層堆積土坑群実測図 (1/20)	19
第18図 出土遺物遺物実測図 (1/4)	20

付 表 目 次

付表-1 本書報告調査地一覧表	ii
付表-2 報告書抄録	22

第1章 長岡京跡右京第932次（7 A N K N Z - 13地区）調査概要

-長岡京跡右京六条三坊一・八町（西三坊坊間東小路）、開田城ノ内遺跡-

1 はじめに

- 1 本報告は、2008年1月15日から2月7日まで、長岡京市天神一丁目37-3において実施した長岡京跡右京第932次調査に関係するものである。
- 2 本調査は、長岡京跡右京六条三坊一・八町（西三坊坊間東小路）および開田城ノ内遺跡に関する考古学的な資料を得るために実施したもので、調査面積は約60m²であった。
- 3 発掘調査は、平成19年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター調査係長の山本輝雄が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺の方々に種々のご理解とご協力を賜わった。
- 5 本文の執筆、編集は山本が行った。

2 調査経過

今回の調査は、これまで調査事例の極めて乏しかった長岡京の西三坊坊間東小路を検出することに主眼をおいて行ったものである。



第2図 発掘調査位置図 (1/5000)

2 調査経過

調査地は、阪急京都線の長岡天神駅から西方約220mの地点にあたる静閑な住宅地の一角に位置している。北西約200mには、京都府長岡京記念文化会館をはじめ、長岡市立中央公民館や図書館、長岡中学校などの文教施設が所在しており、また西に約150mほど行けば、長岡天満宮の広大な社域となり、きりしまツツジで有名な八条が池が満面に水を蓄えている。調査地を地形的にみると、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する段丘をおおう扇状地上に立地しており、現地表面での標高は26m前後である。

当地は、長岡京の条坊復元によると、右京六条三坊一町と八町にまたがっており、西三坊間東小路が想定されるとともに、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である開田城ノ内遺跡の範囲にも含まれていた。この周辺では、これまでに右京第439次⁽¹⁾、同第441次⁽²⁾、同第447次⁽³⁾、同第566次⁽⁴⁾、同第651次⁽⁵⁾などの調査が実施されており、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居をはじめ、奈良時代の掘立柱建物や中世の井戸など各時代の遺構が確認されていた。特に、右京第441・447次調査では、長岡京期と考えられている溶解炉跡が群集した状態で確認されており、京内に生産工房が存在したことを示唆する事例として注目されている。

今回の調査にあたっては、東西約15m、南北約4mの調査区を設定し、1月15日から重機で盛土などを掘削し、その後人力で遺構の検出作業を行った。その結果、まず近世と中世の遺構を検出して掘り進め、1月18日に写真撮影と実測作業を行った。その後、長岡京期の条坊遺構などの検出と掘り下げを行って1月25日に写真撮影。さらには下層遺構の調査に取り掛かり、竪穴住居や土坑などといった開田城ノ内遺跡に関わる弥生時代の遺構群を検出した。そして、2月1日に最後の写真撮影と実測作業などを進め、2月7日に調査区を埋め戻して旧状に復し、現地での調査を終了した。

なお、調査区心の国土座標値は、X = -119,498.5、Y = -28,041である。



第3図 調査前風景（北東から）



第4図 調査作業風景（西から）

3 検出遺構

(1) 基本層序

調査地は、駐車場として使用されている造成地であって、上面には碎石が敷き詰められていた。その下の基本層序を述べると、まず厚さ0.25~0.6mほどの盛土があり、その下には灰褐色砂質土、暗褐色粘質土、暗橙褐色土の順で堆積しており、地表下約1mほどで橙褐色粘質土の地山に至っていた。灰褐色砂質土は厚さが約0.4mほどあり、江戸時代から長岡京期までの遺物を、また暗褐色粘質土には弥生土器や古墳時代の須恵器などを包含していた。地山面は、更新世に形成された段丘を構成する土壤で、標高は調査区西端で約25m、東端で約24.7mと西から東に向かって非常に緩やかではあるが傾斜していることが明らかとなった。遺構は、暗褐色粘質土の上面で長岡京期以降の遺構を検出した他、地山面上においても弥生時代の遺構を検出することができた。以下、検出した主な遺構について説明を加える。

(2) 中世以降の遺構

土坑SK01 調査区の西部で検出した平面が楕円形を呈する土坑である。径1.3~1.4m、深さ約0.35mほどの規模があり、黄褐色土班入茶褐色土が1層堆積していた。埋土中からは、土師器や陶磁器、土管の破片など近代の遺物が少量出土している。

土坑SK02 調査区の北東部で検出した不整形な土坑で、北側は調査区外に延びている。東西約20.5m、南北1.6m以上の規模があり、深さは0.45mほどある。土坑内の埋土は、黄灰褐色砂質土、暗黃茶色砂質土、茶黒色粘質土の3層に分けることができ、その内上2層から弥生土器、土師器、瓦器、陶磁器、平瓦など新旧の遺物が混在した状態で遺物が出土している。

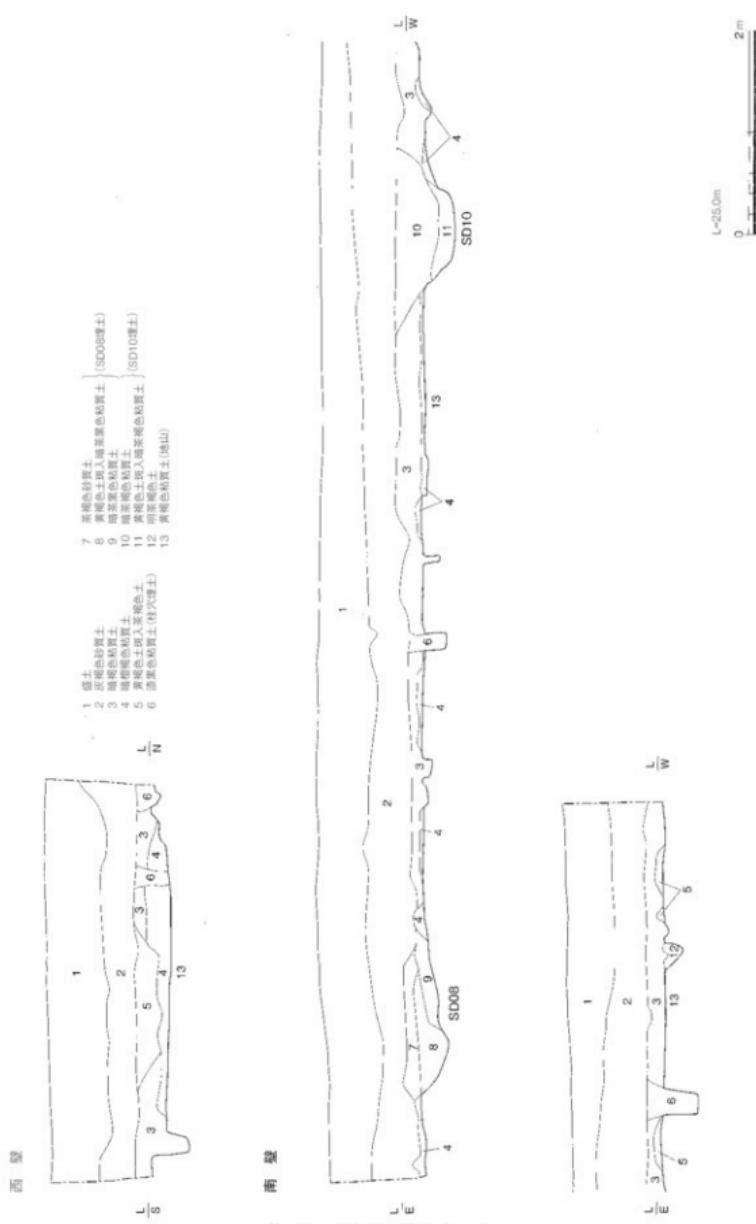
土坑SK03 調査区北辺の中央部で検出した隅円方形を呈する土坑で、北側は調査区外に延びている。東西約2.6m、南北0.8m以上あり、深さは約0.5mほどある。土坑内の埋土は、黄灰褐色砂質土と暗黃茶色砂質土の上下2層で、土坑内には両拳大の砂岩や石灰岩などの自然礫や花崗岩の切石などが埋没していた。遺物は、土師器や陶器など近世のものが主体で、他に長岡京期の軒平瓦なども混在した状態で出土している。

溝SD04 南北方向の素掘り溝であるが、直線的ではなく、やや蛇行している。幅約0.4m、深さ約0.1mほどあり、平瓦などが出土している。

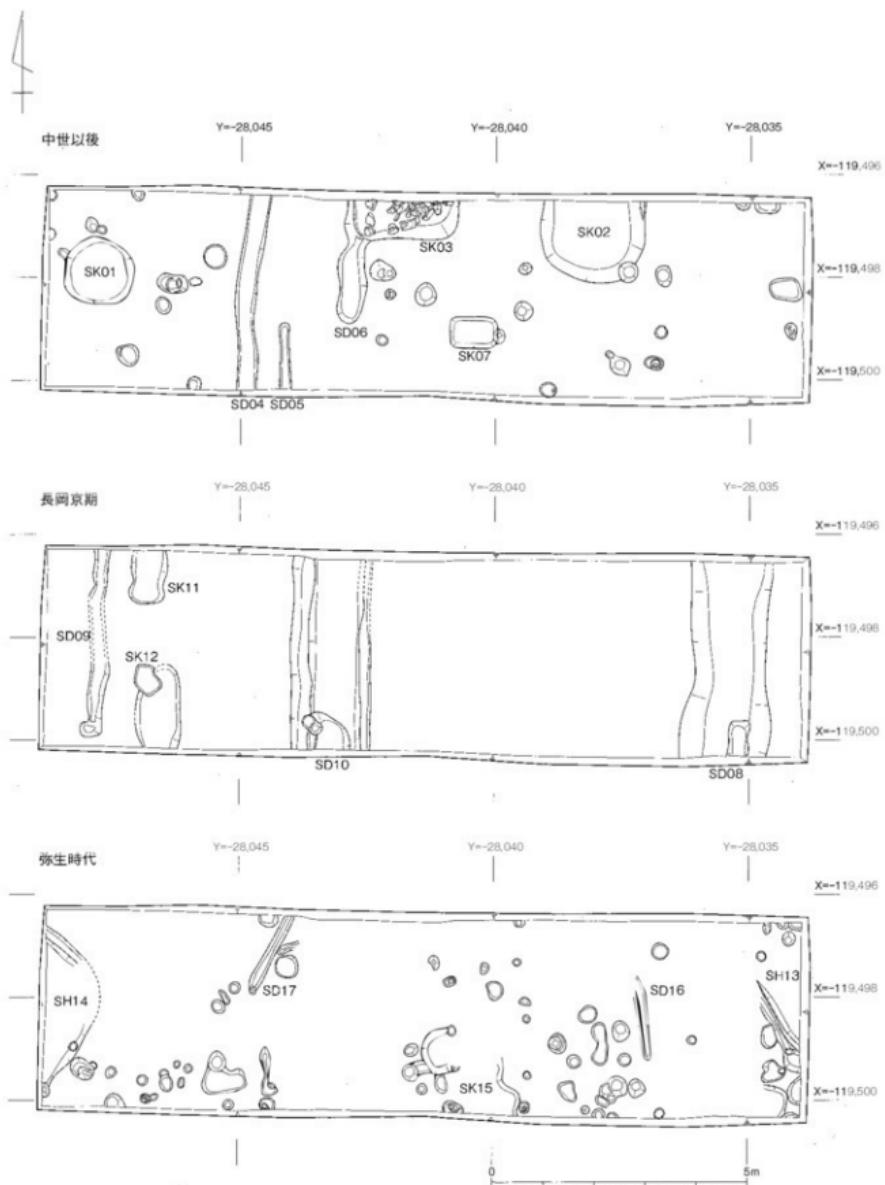
溝SD05 SD04のすぐ東側で検出した南北溝であるが途中で途切れている。幅約0.25m、深さ約0.05mしかなく、遺物は何も出土しなかった。

溝SD06 土坑SK03の南西隅から南に延びる素掘りの溝で、調査区の半ばで途切れている。溝幅は約0.6m、深さ約0.3mほどあり、溝内からは土師器や須恵器、陶器など近世の遺物の他、瓦器や弥生土器なども少量出土している。

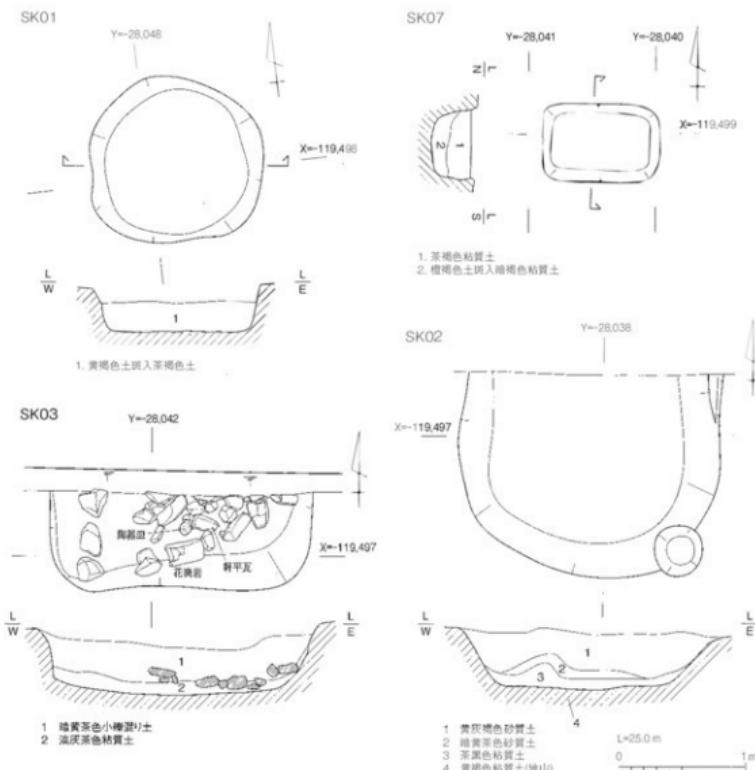
土坑SK07 隅円長方形を呈する土坑である。東西約0.95m、南北約0.6m、深さは約0.35mほどの規模があり、埋土は茶褐色粘質土と橙褐色土班入の上下2層に分けられ、弥生土器、土師器、瓦器などの遺物が少量出土している。



第5図 調査区土層図 (1/50)



第6図 検出遺構図 (1/100)



第7図 土坑実測図 (1/40)

この他、調査区の各所から円形および稍円形を呈したいくつかの柱穴状の遺構を検出しているが、掘立柱式の建物や塀として並ぶものは確認していない。

(3) 長岡京期の遺構

この時期の遺構としては、西三坊間東小路の東西両側溝をはじめ、溝、土坑などを検出することができ、当初の目的を達成することができた。

西三坊間東小路東側溝 S D08 調査区の東端部で検出した南北方向に延びる素掘りの溝である。溝の肩部は東西とも出入りがあるが、幅1.35~1.8m、深さは約0.35mの規模がある。溝底は北から南に緩やかに傾斜しており、調査区の南端では土坑状に窪んでいた。溝内の埋土は、茶褐色粘質土、黄褐色土斑入暗茶黑色粘質土、暗茶黑色粘質土の3層に分けられ、土師器、須恵器、瓦などの遺物が出土した。溝心の国土座標値は、X = -119,498.5、Y = -28,035.4である。

西三坊間東小路西側溝 S D10 調査区の西部で確認した南北方向に延びる素掘りの溝で、肩

部は直線的に延びて2段に落ち込んでいる。溝幅約1.6m、深さは0.35mほどあり、底部は凹凸が認められるが、おむね南に向かって緩やかに傾斜している。溝内の埋土は、暗茶褐色粘質土と橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土の上下2層に分けられ、土師器、須恵器、土馬、瓦、炭などの遺物が出土している。溝心の国土座標値は、X = -119,498.5、Y = -28,043.2で、東側溝心の数値から得られる西三坊間東小路の路面幅は約7.8mとなり、これまで知られている他の小路の規模よりも1m前後狭いことが判明した。

溝S D09 調査区西端付近で検出した南北方向の素掘り溝で、幅約0.3m、深さ約0.1mほどある。

土坑S K11 S D09の東側で検出した不整形な土坑。埋土はS D09と同じ暗茶褐色土である。

土坑S K12 S D10のすぐ西側で検出した不整形な土坑。東西約0.6m、南北0.3~0.45m、深さは0.1mで、土師器、須恵器、それに自然礫などが出土している。

(4) 弥生時代の遺構

竪穴住居S H13 調査区の東端で検出した竪穴住居の一部と考えられるが、大部分が調査区外にあるため、断定はできない。深さ約0.2mほどで、暗褐色粘質土と黒褐色粘質土が堆積し、弥生土器の小片が出土している。

竪穴住居S H14 調査区の西端で検出した。この遺構も隅丸方形を呈する竪穴住居の一部と推察されるが、断定はできない。深さは約0.3mほどで、暗褐色粘質土と橙褐色土斑入暗褐色土が堆積しており、弥生土器の破片が少量出土した。

土坑S K15 S K07の周辺で検出した不整形な土坑状の窪み。暗褐色粘質土が堆積しており、弥生土器の破片が出土している。

この他、竪穴住居の壁溝かも知れない細い溝S D16・17や建物の柱穴の可能性がある遺構をいくつか確認しているが、確定するまでには至らなかった。

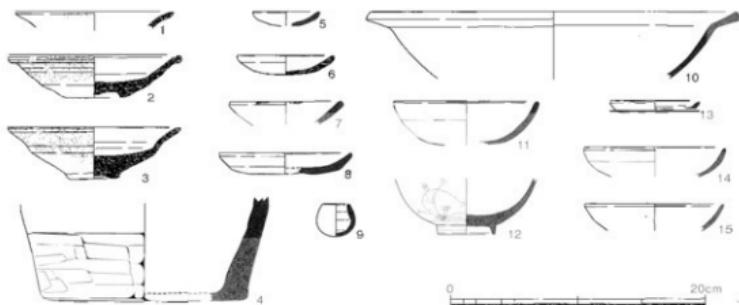
4 出土遺物

今回の調査において出土した遺物は、整理箱に3箱ほどあり、その内訳は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、軒丸瓦、平瓦、土馬、花崗岩の切石、銭貨、鉄釘など弥生時代から近世に至る各時代のものがある。それらの大半は、遺構から出土したものであるが、堆積層から出土したものもある。

(1) 近世・中世の遺物（第8図）

土坑S K02・03出土遺物 3・5はS K03から、7はS K02から出土したものである。3は唐津の皿で、口縁部は外反して立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面の見込みには、三叉トチンの痕跡をとどめている。素地の色調は濃赤褐色、釉薬は乳緑灰色を呈しており、口径13.6cm、底径3.6cm、器高4.1cm。5・7は土師器の小皿である。5は口径5.2cm、器高は1.1cm以上、7は口径1.8cmで、口縁端部の内外面に油煙の痕跡をとどめている。

溝S D06出土遺物 1・2は唐津の皿である。1は皿の口縁部の破片で、口径は12.4cmに復元でき、素地の色調は赤褐色、釉薬は乳灰色を呈している。2は折縁皿で、口縁部の一部を欠損す



第8図 近世・中世の遺物実測図（1/4）

る。口縁端部を屈曲させて丸くおさめており、内面の見込みには三叉トチンの痕跡をとどめている。素地の色調は赤褐色、釉薬は乳緑灰色を呈しており、口径13.6cm、底部径4cm、器高3.3cmある。11は土師器の椀で、内面と口縁部外面をナデを施して調整しているが、それ以外は未調整である。口径11.8cm、器高3.3cm以上あり、硬質に焼成されている。

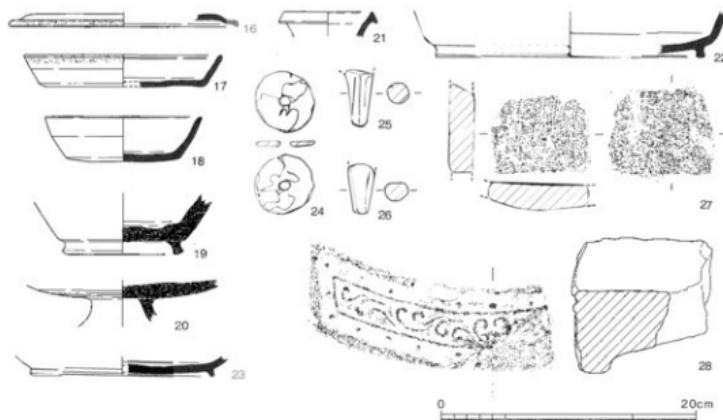
土坑SK07出土遺物 土師器、瓦器などが出土している。13は土師器の小皿で、口径7cm、器高0.9cmに復元できる。14は土師器の杯で、口径は11.2cmほどの大きさに復元できる。

灰褐色砂質土出土遺物 4は土師器の壺の底部片で、平底の底部径は16cm、器高8.1cm以上ある。底部外面の下半はケズリを施して調整している。6・8は土師器の小皿で、6は口径7.6cm、器高1.5cm、8は口径10.4cm、器高1.7cm。9は、底部が平たくて下方がふくれ、口がすぼんだ形態のいわゆる「つぼつぼ」と称される小さな壺である。手づくねによって作られており、口縁端部は内傾してすぼまっている。素焼きに焼成されており、口径2.1cm、体部最大径3cm、器高2.6cmある。10は土師器の鍋である。口縁部がくの字状に大きく屈曲して外上方に開き、底部は丸味を帯びている。口径29.6cm、器高36cm以上あり、型によって作られている。外面には煤が附着していることから、煮沸に使用されたことが分かる。12は染付けの碗で、見込みには釉剥ぎの痕跡をとどめている。釉は青みがかった乳白色を呈し、高台径4.6cm、器高は4.3cm以上ある。15は瓦器椀の口縁部片である。全体に摩滅が顕著で、調整技法は不明である。口径は11cmほどに復元でき、口縁端部内面に沈線1条を施している。

(2) 長岡京期の遺物（第9図）

西三坊坊間東小路東側溝SD08出土遺物 この溝からは、土師器の椀・皿、須恵器の杯・壺、瓦などの遺物が出土している。19は須恵器壺の底部片である。22は須恵器皿Bの底部片で、高台径が21.2cmに復元できる大型品である。

西三坊坊間東小路西側溝SD10出土遺物 この溝からは、土師器、須恵器、土馬、瓦などの遺物が出土している。21は須恵器壺Mの口縁部片で、端部を上下に拡張させて内傾する面をもつ。口径は7.8cmに復元できる。23は土師器杯Bの底部片で、色調は赤褐色を呈し、高台径は14.5cm



第9図 長岡京期の遺物実測図（1/4）

ある。26は土馬の脚部片。

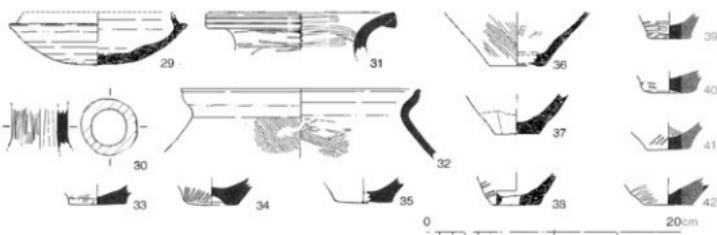
土坑S K12出土遺物 この遺構からは、須恵器の杯A、高杯などが出土した。杯A（18）は、底部がやや丸味を帯びており、軟質に焼成されているため色調は灰白色を呈している。口径12.2cm、器高3.5cmに復元できる。高杯（20）は、口縁部と脚据部とを大きく欠失している。

その他の遺構・包含層出土遺物 上記以外の遺構や堆積層からもこの時期の遺物が出土している。16はS K02から出土した須恵器の杯B蓋の破片で、口縁端部に重ね焼きの痕跡をとどめ、口径は1.8cmに復元できる。17はS D09から出土した須恵器皿A。軟質に焼成されているため灰白色を呈し、口縁端部には重ね焼きの痕跡をとどめている。口径15.5cm、器高2.5cmに復元できる。24は、紡輪形を呈した土製品である。土師器の杯皿椀などの底部付近を楕円形になるように打ち欠いて作られたもので、径4.6～4.8cm、厚さは0.4cmを測る。表面が剥離している部分もあるが、中央部には径0.8cmほどの円孔を穿っている。25は土馬の脚部片である。27は溝S D04から出土した平瓦の破片である。全体に摩滅しているが、凸面に繩目タタキの痕跡が、凹面には布目の痕跡をとどめており、厚さは約2cmある。須恵質に焼成されているが、色調は灰色を呈する。28は、土坑S K03から出土した唐草文軒平瓦の左半分の破損品である。胎土に雲母と砂粒を少量含み、灰褐色を呈する。中心飾りに「井」を配する長岡宮式の7757B型式に相当するものと考えられる。凸面に繩タタキ、凹面に布目の痕跡をとどめる。

（3）古墳・弥生時代の遺物（第10図）

これらの時代の遺物は、堅穴住居や土坑などの遺構、暗褐色粘質土から出土している。小さな破片の占める割合が多く、図示し得たものは乏しい。

29は、暗褐色粘質土から出土した須恵器の杯身。立ち上がりが短く内傾し、回転ヘラケズリで調整された底部は丸みを帯びている。口径は不明であるが、受け部の径は14cmに復元できた。



第10図 古墳・弥生時代の遺物実測図（1/4）

30~42は後期の弥生土器である。31は、暗褐色粘質土から出土した壺の口縁部片。大きく開く口縁部の端部を下方に拡張させて面を有し、そこに2条の擬凹線を施している。内外面とも横向向にミガキを施して調整しており、口径は15cmに復元できる。32は受け口状の口縁を有する甕の口縁部片で、体部の内外面はハケメを施し、口径は18.8cm。この他、体部にタタキの痕跡をとどめた甕もある。30はSH13から出土した高杯の脚柱状部である。外面はヘラミガキ調整して仕上げ、内面には絞り目の痕跡をとどめている。33~42は、壺または甕の底部片である。いずれも底部径が3.4~4.3cmほどと小さく、平底のもの（33・35~37・39~41・42）、上げ底のもの（34・40）、穿孔されているもの（38）などがある。外面に右上がりのタタキ痕跡をとどめているものがほとんどであるが、ハケメを施すもの（36）やケズリを加えたもの（37）などがある。36がSH13、42がSK15、他は暗褐色粘質土から出土した。

5まとめ

以上みてきたように、今回の調査では、当初の予想どおり西三坊間東小路の東西両側溝を検出することができ、大きな成果を得ることができた。この小路については、これまで当地のすぐ南側で行われた第95274次立会調査⁽⁶⁾で東側溝が確認されているにすぎなかったが、最近右京第903次調査でも東西両側溝が確認され、比較検討できる事例がわずかとはいえ増加した意義は大きい。⁽⁷⁾両地点は、南北に約2300mも隔たっているが、ともに路面幅（側溝心々間距離）が9mに満たないことで共通していることは、他の小路と相違している可能性が濃厚となり、その性格を考える上に重要な資料になるであろう。

注1) 原秀樹「右京第439調査概報」『長岡京市センターニュース』平成5年度 1995年

2) 小田桐淳「右京第441調査略報」『長岡京市センターニュース』平成5年度 1995年

3) 小田桐淳「右京第447次調査概要」『長岡京市報告書』第32冊 1994年

4) 原秀樹「右京第566調査概要」『長岡京市報告書』第38冊 1998年

5) 小畑佳子「右京第651調査概報」『長岡京市センターニュース』平成11年度 2001年

6) 花村潔「第95274次立会調査概報」『長岡京市センターニュース』平成7年度 1997年

7) (財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12』 2008年

第2章 長岡京跡右京第948次（7 A N G K C - 1 地区）調査概要

- 長岡京跡右京二条三坊六町、上里遺跡 -

1 はじめに

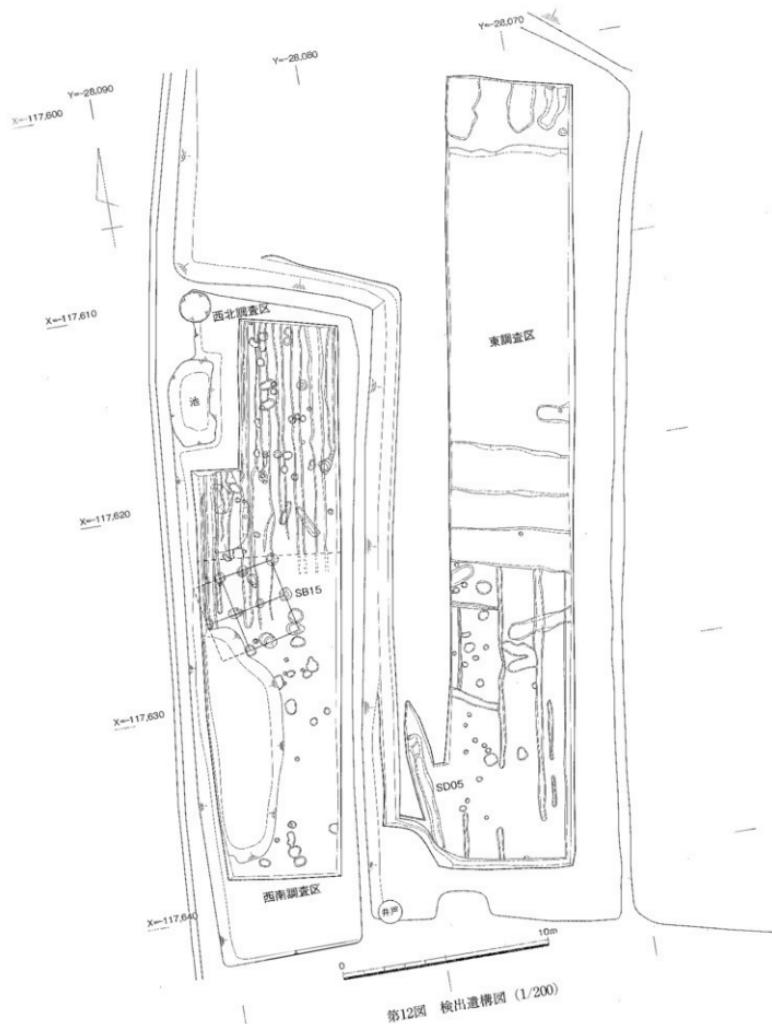
- 1 本報告は、2008年6月23日から9月9日まで、長岡京市井ノ内上東ノ口9において実施した長岡京跡右京第948次調査に関するものである。9月1日に、土地所有者への調査成果報告を調査地でおこなった後、原状に復した。
- 2 本調査は、長岡京跡右京二条三坊六町および上里遺跡に関する考古学的な資料を得るために実施したもので、調査面積は約400m²であった。
- 3 発掘調査は、平成20年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター調査係総括主査の岩崎誠が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺の方々に種々のご理解とご協力を賜わった。
- 5 本文の執筆、編集は岩崎 誠が行った。



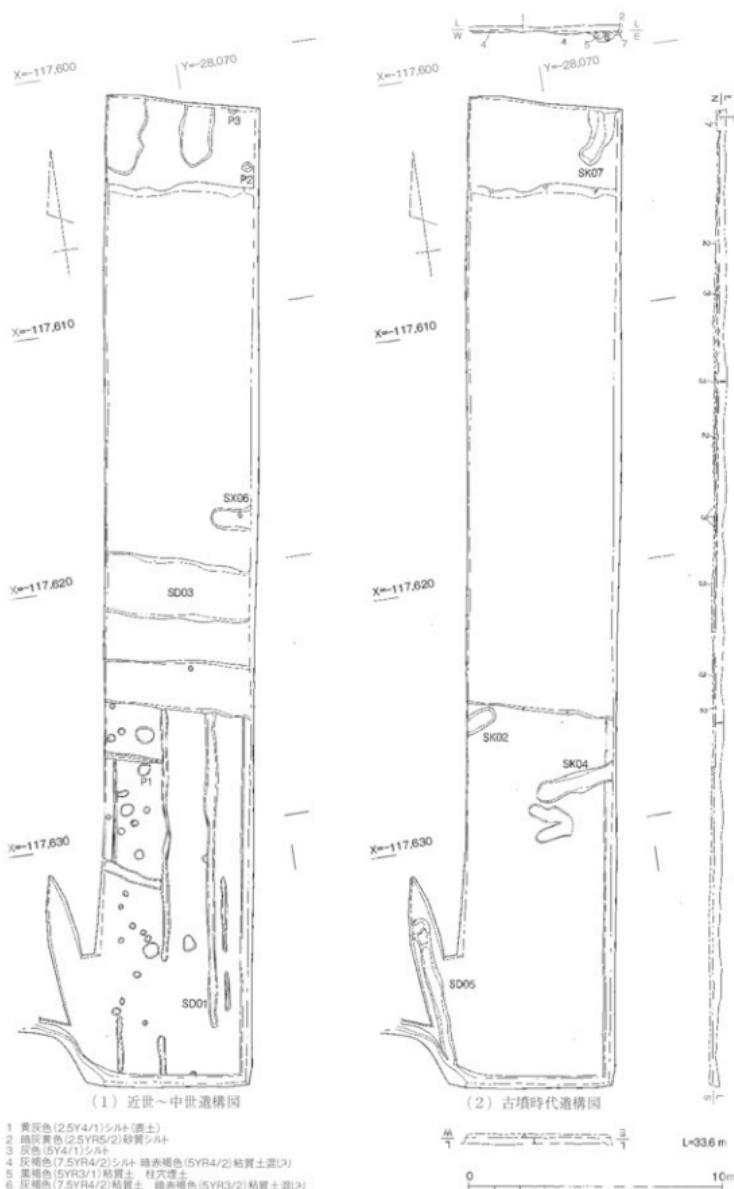
2 調査経過

当調査は、長岡京跡と、これに重複する上里遺跡、および南接する井ノ内遺跡に関連して、これら各遺跡の保存に必要な資料を作成する目的で実施した。これまでの周辺部での調査事例を概観すると、以下のような成果がうかがえる。まず長岡京跡に関連する成果を概観する。右京第22・25次調査では、右京二条三坊二町から七町にかけての条坊復原推定位置で実施されている。^(注1) この調査では、三坊二町の方は、宮城を除く京内で最大規模の大型掘立柱建物を主殿とし、これに伴う後殿を配置した1町規模宅地と推測され、また西接する七町側では、小規模建物2棟や柵などが検出されているほか、「大舎人寮」と書かれた墨書き土器が出土しており、両町とも長岡京のかなり重要な施設であったと指摘されている。また、この両町に北接する三坊一町の北西部から三坊八町にかけての右京第850・878次調査が財團法人京都市埋蔵文化財研究所によって実施され、一条大路に南面した八町北辺部に「コ」の字形に東西棟が配置され、倉庫をもつ築地で囲まれた施設の存在が報告されている。上里遺跡に関わる成果としては、右京第850・878次調査で、縄文時代晩期の集落や土器棺墓群が明らかになっており、弥生時代前期の竪穴住居や土器棺墓群、古墳時代後期の竪穴住居群なども検出されている。右京第22・25次調査では、縄文時代中期や後期初頭の土坑などが検出されているほか、弥生時代前期の土坑、古墳時代後期の流路や土坑などが検出されている。当調査地の北西に隣接した位置では、長岡京跡右京第694次調査が実施され、長岡京期と考えられる南北方向の柵や小規模な南北棟建物が検出されている。この調査地は、長岡京条坊復原によると当調査地と同じ右京二条三坊六町内にある。またナイフ形石器が出土したほか、飛鳥～平安時代にかけての遺構・遺物が報告されている。南接する井ノ内遺跡は弥生時代後期や古墳時代後期の集落遺跡としての成果が大きく、今里遺跡は弥生時代中期や古墳時代中期から後期の集落遺跡として見落とせない存在である。このような周辺部の調査成果は、当調査の位置を決定する重要な要素となっている。

調査は、最初に、幅約6m、長さ約38mの南北に長い調査区を休耕田地に設定した（第12図、図版6（1））。これを東調査区と呼ぶ。この調査区では、数基の柱穴や溝、流路、土坑などを検出したが、広い面積を設定したにもかかわらず、長岡京関連遺構は皆無で、柱穴群も柵や建物跡としてまとまりに捉えることができなかった。ただ、調査区南西隅で検出した北西～南東方向の古墳時代後期の溝が直線的であり、これに伴う何らかの施設が、調査区西隣地に所在する可能性が考えられた。そこで、当市教育委員会が土地所有者に新たな調査区の設定に理解を求め、快諾を得た上で、西調査区の調査に取り組んだ。西調査区は、東調査区より約50cm高い休耕田で、北東方向に降る棚田状地形になっている。西調査区は、東調査区の古墳時代溝に近い位置で調査を開始した。ところが、設定した調査区の北部で遺構の密度が高く、掘立柱建物や、炭灰堆積のある土坑群などを検出した。そこで、さらに北側に調査区を設定して、関連遺構の追及を行った。この西調査区で、最初に調査した南部を西南調査区（図版6（2））、北への遺構追求調査範囲を西北調査区（図版7（1））と呼ぶ。



第12図 検出遺物図 (1/200)



第13図 東調査区遺構変遷図 (1/200)

3 検出遺構

(1) 東調査区

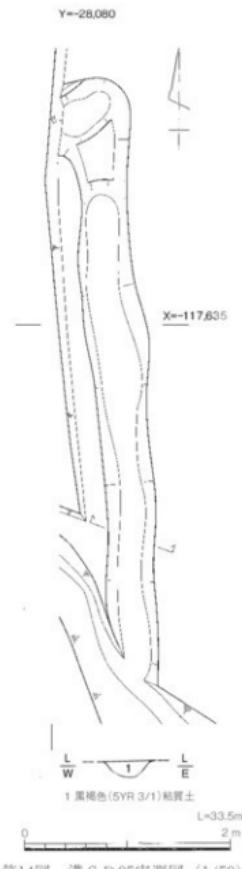
東調査区（第13図）は、遺構検出面の上には、基本的に3層の堆積が見られた。第1層は、厚さ約30cm前後の現在の耕作土、第2層は、厚さ約10cm前後の灰黄色鉄分沈殿層、第3層は、当調査区北部域の深い窪みに堆積した厚さ約10cm前後の灰色シルト層である。遺構検出面は、流路堆積と考えられる灰色系砂礫および段丘堆積と考えられる黄橙色系の礫またはシルト上面であった。標高は、33.5m前後である。

検出遺構には、中・近世のものと、古墳時代以前のものがある。これらの各遺構は、当調査区中央部、特に西部域での検出遺構の深さが浅く、北東部の遺構残存状況が良好な傾向がある。これは、南西から北東に降る棚田状の地形と関連し、当調査区の西部域が削平され、水平面に耕地開墾されたためであろうと考えられる。

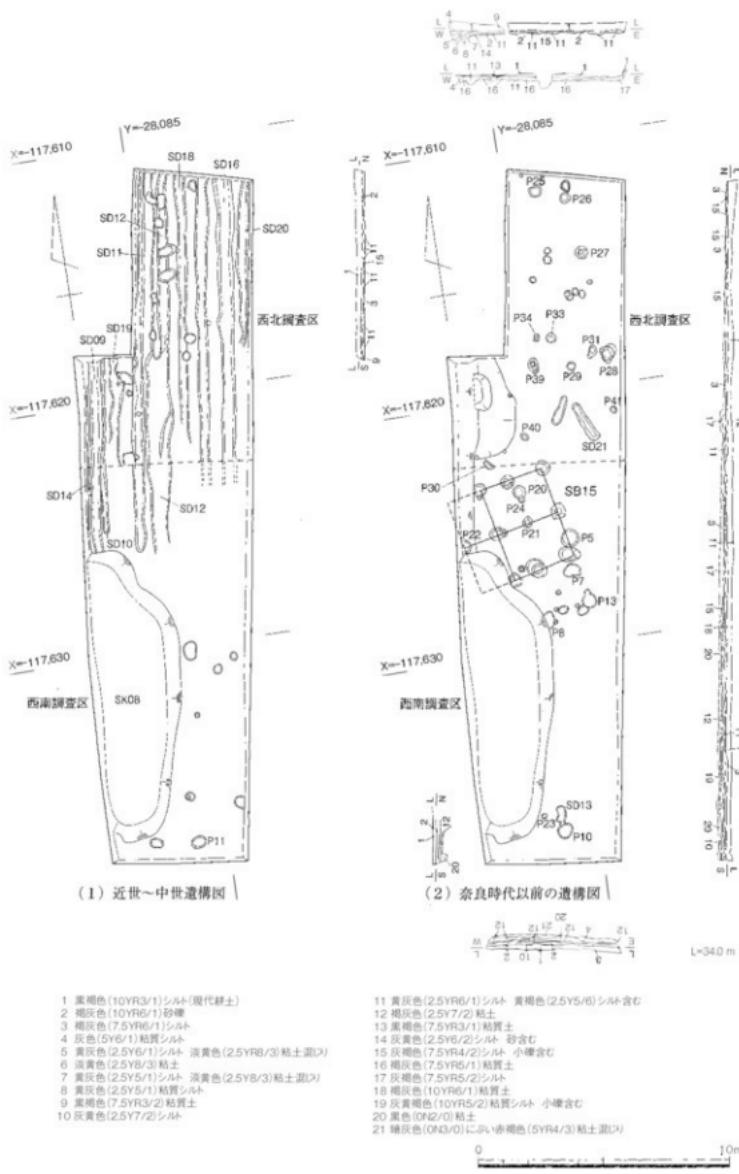
【近世の遺構】 近世遺構は、南北方向の溝群（溝S D01など）や、東西方向の溝群などがあり、調査区北部には、幅約20mで深さ約5cmの深い窪みが東西方向に見られる。深い窪みの南部には、幅約2.5mで深さ約5cmの深い東西溝S D03がある。また島状の高まりになった部分（SX 06）もあった。南北方向の細い溝群は、幅約20~30cm前後、深さ約10cm前後で、旧国土座標の北で8°東に傾く方向に平行し、溝心芯間を約1.8m等間に配置するものがみられる。

【中世の遺構】 中世遺構には、溝や土坑、柱穴群などがある。柱穴P 1など、ほとんどの柱穴は、深さ約5~10cm前後と浅く、灰色系の埋土であるが、柱穴P 2とP 3は黒褐色粘質土が埋土で、深さ約20~30cmと深く、明瞭な残存状況であった。

【古墳時代以前の遺構】 古墳時代の遺構には、溝S D05がある（第14図、図版8(1)）。規模は、幅約60cm、深さ約18cmで、調査区南端から約7mの長さまで検出した。旧国土座標系の北で西へ約5°の傾きをもつ。埋土は黒褐色粘質土1層からなり、古墳時代後期の須恵器杯身や土師器壺の小片を少量包含する。出土遺物がなく、時期が確定できなかった遺構には、土坑4基がある。いずれも暗赤褐色から黒色系の粘質土を埋土とし、古墳時代か、またはより古い時代の所産と考えられる。形状は不定形で、溝状のものが多い。削りこまれた土層と埋土には、明瞭な境のない部分もあり、自然作用による所産かも知れない。



第14図 溝 S D 05 実測図 (1/50)



第15図 西調査区構造変遷図 (1/200)

(2) 西調査区

西調査区は、東調査区より約50cm高い休耕田での調査で、先にも記したように、西南調査区と西北調査区に分けて調査した（第15図）。その結果、中・近世の遺構群と、奈良時代以前の遺構群が検出できた。遺構検出面までの堆積には、厚さ約20cm前後の現代耕作土と、厚さ約10cm前後の褐灰色シルト層があり、西南調査区では、その下に厚さ約10cm足らずの黄灰色鉄分沈殿層が見られた。遺構検出面を構成する土層は、西南調査区南部では、黒色粘土層であり、それより北では、黄橙色から灰褐色の段丘堆積疊またはシルトであった。

〔近世の遺構〕 近世の遺構には、杭で護岸された池S K08や、椿円形土坑6基の他、南北方向の溝群がある。池S K08は、南北約11.5mの掘り込みで、東肩のみ検出し、西へ広がる状況を確認した。池内の堆積には、江戸時代以後の遺物が含まれていた。深さは、南端部で1m以上で、軟弱な地盤のため、完掘できなかった。南北溝は、北で東へ約8°傾く方向に平行しており、東調査区の南北溝群と共に通する。南北溝の内、溝S D09と溝S D14は深さ約40cmと深いが、他は10cm前後の深さで浅い。平行する溝の間隔は10cm前後と狭い点は、東調査区の状況と異なる。

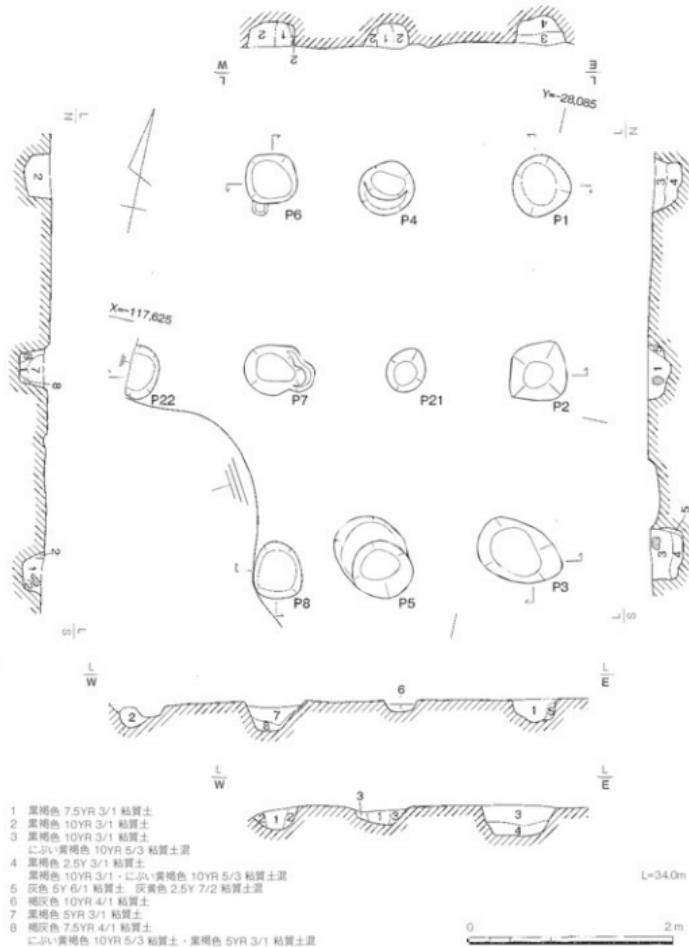
〔中世の遺構〕 中世遺構は、主に柱穴群である。柱穴群には、直径約15cm程度の小規模なものから、直径約50cm程度のものまである。後者のうち柱穴P11は、深さ約40cmと深く、埋土に土師器皿の小片や瓦器碗が含まれていた。柱痕の観察できるものは少なかった。この時期の柱穴群からは、柵や建物として捉えられる柱穴列は見出せなかった。柱穴埋土には、黒色系のものと黒褐色系のものがあり、柱穴P11は後者に含まれる。

〔奈良時代以前の遺構〕 奈良時代以前の遺構には、柱穴群や溝状遺構、土坑などがある。柱穴群には、柱痕が観察できるものも少なくない。西南調査区には、掘立柱建物としてのまとまりをもつものもある。西南調査区検出の土坑には、埋土の最下層に炭灰堆積のあるものが4基見られた。この土坑群は、輪郭を検出した時点で円形掘形をもつ柱穴と判断したため、遺構名記号が「P」となっている。掘立柱建物と炭灰層堆積のある土坑とは、重複位置にあるものが見られるが、掘立柱建物の柱穴との重なりがなく、両者構築時期の前後関係は明らかにできなかった。

掘立柱建物S B15 南北方向の掘立柱建物で、北で西へ約10°傾く柱列をもつ（第16図、図版7(2)）。東調査区の溝S D05より傾きが大きい。南北は、柱間約1.8m等間で2間の規模である。東西は、2間または3間で、東から柱間約1.5m・1.2m・1.2mを測る。この内、第16図に示したP4・P21・P6・P7～P9・P22を東西柱間1.2m等間の総柱倉庫としてP1～P3を底または柵とする見方もある。調査中の判断としては、P1～P8までを1棟と捉えたが、検討の余地を残す。各柱掘形は、基本的に隅円方形掘形で、1辺約50～60cmの規模をもち、深さ30cm前後の残存状況であった。柱痕の分かるものでは、直径約15cm程度の柱と考えられる。柱痕の観察できなかった柱穴のうち、P1～P3とP7には、柱抜き取り跡と察せられる土層堆積が観察できた。柱穴埋土からは、古墳時代の土器小片が少量出土したが、時期を確定できる資料は得られなかった。今里遺跡検出の掘立柱建物で、西に約10°前後振れているものは、奈良時代のものと考えられている。⁽²⁾当建物も、8世紀の所産かも知れない。当調査地の北西約30m地点で調査さ

れた右京第694次調査でも、同じ振れ角の柵 S A03が検出されている。報告では、飛鳥～平安時代と幅広く捉えているが、今回検出した建物と関連深いと察せられる。

炭灰層堆積の土坑群（P 5・7・8・20） 残存状況が良かった土坑P 5は、直径約70cmの円形で、深さ約15cm、土坑P 20は直径約50cmの円形で、深さ約10cmの残存状況であった。上面をかなり削平されている土坑P 7・P 8は、深さが約7～8cm前後の残存状況であった。いずれの土坑も底は平坦面でなく、皿状になっている。埋土は基本的に2層からなり、下層には土を伴わない炭灰が堆積していた。この炭層は、土坑P 20の断面図に見られるように、検出面の土坑肩

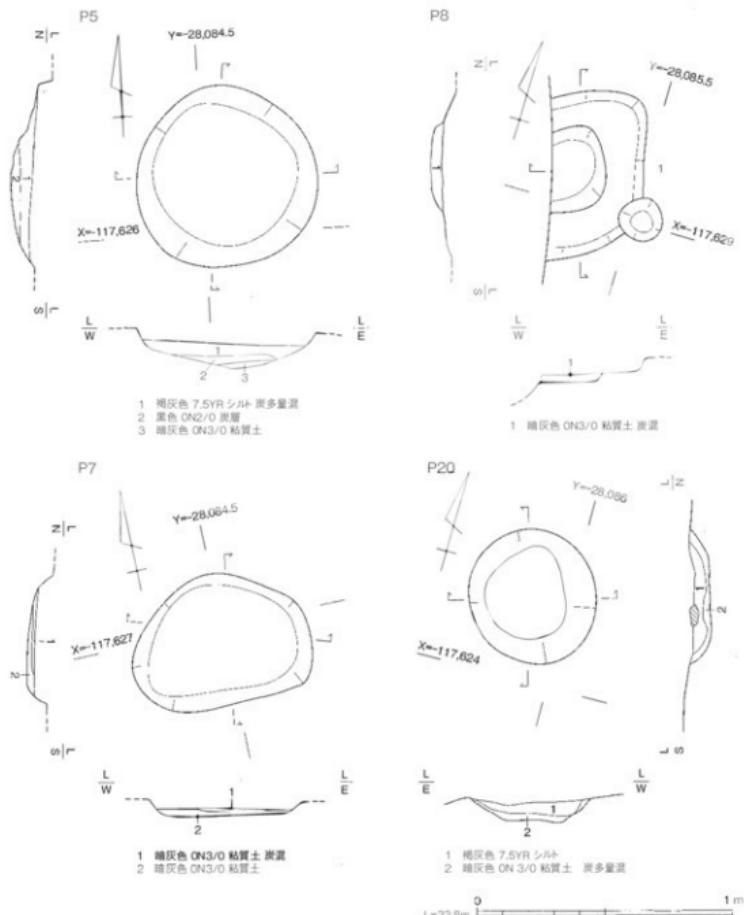


第16図 掘立柱建物 S B15実測図 (1/50)

部から最深部まで、土坑内面を覆うように見られた。土坑に焼け土や熱による変色面は見られなかった。これらの設置目的や性格は不明である。

4 出土遺物

出土遺物には、近世の土師器や陶磁器、中世の土師器・瓦器・輸入磁器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器・土師器、弥生時代の後期土器、縄文時代石器などがある（第18図、図版8(2)(3)）。土器類はほとんどが細片で、図化できる残存状況のものは第18図で全てである。1は柱穴



第17図 炭灰層堆積土坑群実測図 (1/20)

P 11から出土した瓦器碗である。厚い器壁で、内面に緻密なヘラミガキを施し、外面にもミガキ痕が残る。口縁部は強いナデを施し、端部内面側に沈線を施す。2は同安窯系の青磁皿底部片で、近世溝 S D 16から出土した。3は古墳時代須恵器杯身で、短いたちあがりをもつ。口径が14cm前後と大きいことなどから、TK 209型式と思われる。掘立柱建物 S B 15 P 7から出土した。4と5は、古墳時代須恵器高杯である。4には、脚柱状部に長方形透かしを穿ち、5には外反する短い脚部に円形透かしを穿つ。4は近世溝 S D 09から、5は掘立柱建物 S B 15 P 9から出土した。6・7は奈良時代の須恵器で、近世池 S K 08から出土した。6の杯蓋は口縁端部を下方に拡張している。7は底部から口縁部への移行が緩やかで、明瞭な境をもたない。黒色の火捺が残る。8は溝 S D 05から須恵器杯身と共に出土した土師器甕である。9は水晶であるが、加工痕はない。近世溝 S D 03から出土した。10は西南調査区第3層から出土した縄文時代のサヌカイト製凹基式打製石鎌である。11は近世溝 S D 09から出土した須恵器甕の体部片である。12は西南調査区第20層上面から出土した弥生後期土器の底部片である。

5 まとめ

当調査では、長岡京期に関係する遺構や遺物はなかった。しかし、奈良～古墳時代と考えられる掘立柱建物や溝のほか、炭灰層堆積のある土坑群などを検出した。炭灰層堆積のある土坑群の性格は分からぬが、掘立柱建物 S B 15の検出は、右京第694次調査検出の柵 S A 03と同時期の可能性があり、貴重な存在と言える。この両者の構築時期を含めて、遺構配置や性格を周辺部の調査が進むのを待って再考する必要がある。

注1) 山本輝雄「長岡京跡右京第22・25次調査報告書」『長岡京市センター報告書』第11集 1997年

上村和直・南出後彦「長岡京跡右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡」(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-34 2007年

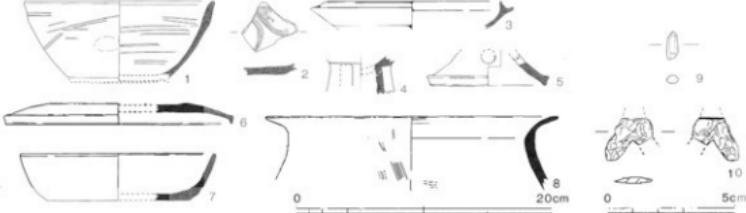
高橋潔・大立目一・津津池物一「長岡京跡右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡」(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-12 2008年

原秀樹「右京第694次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年

2) 山口博「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」「京都府センター概報」第9冊 1984年

木村泰彦「右京第412次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年

3) 原秀樹「右京第694次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年



第18図 出土遺物実測図（1/4）

付表-2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第53冊
編著者名	山本輝雄、岩崎 誠
編集機関	財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 開田城ノ内 遺跡	長岡京市天神 一丁目37-3	26209	107 73	34° 55' 20"	135° 41' 35"	20080115 ~ 20080207	60m ²	遺跡確認 調査
長岡京跡 上里遺跡	長岡京市井ノ うちかわらじ、くち 内東口9	26209	107 7	34° 56' 21"	135° 41' 33"	20080623 ~ 20080909	400m ²	遺跡確認 調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 開田城ノ内 遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸時代	条坊路、土坑、溝 竪穴住居、土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、軒平瓦 弥生土器、土師器、瓦器、陶器	長岡京の西三坊開東 小路の東西両側溝を検出
長岡京跡 上里遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸時代	掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器	奈良時代の建物

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用。

図 版



(1) 上層遺構全景（東から）



(2) 上層遺構全景（西から）

長岡京跡右京第932次調査

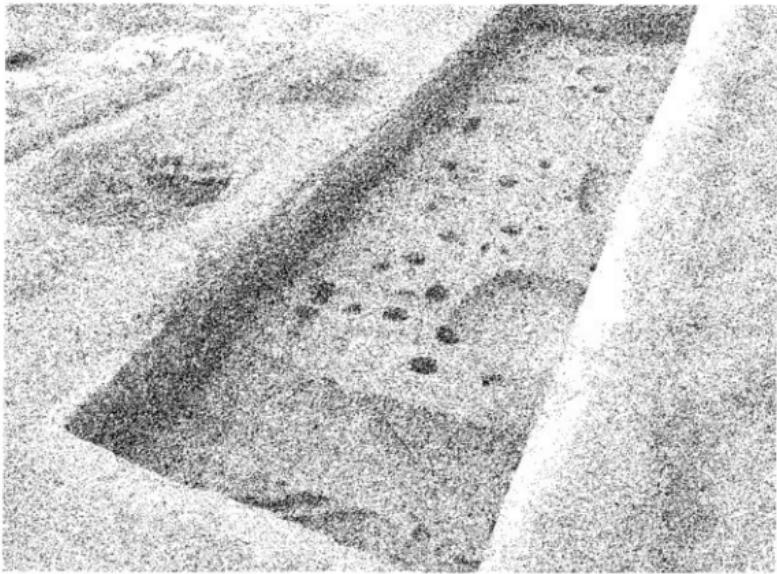
図版
一一



(1) 土坑SK03全景(南東から)



(2) 土坑SK02全景(南から)



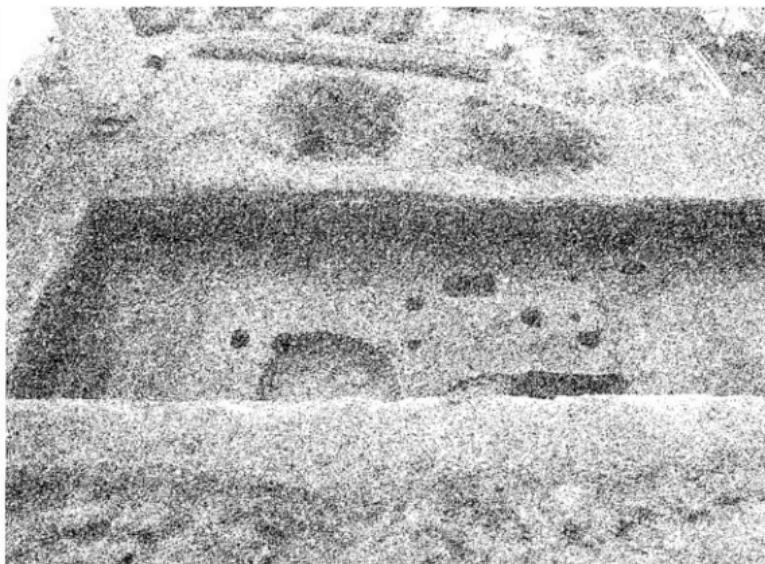
(1) 下層遺構全景（北東から）



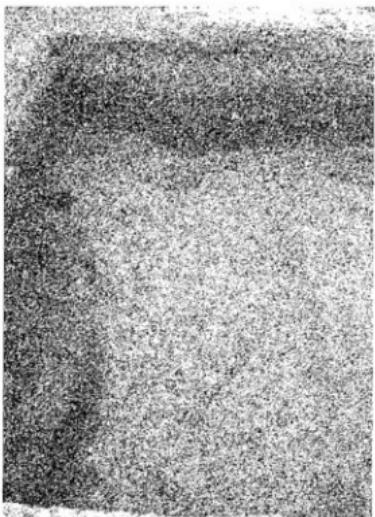
(2) 下層遺構全景（西から）

長岡京跡右京第932次調査

図版四



(1) 西三坊坊間東小路全景（北から）



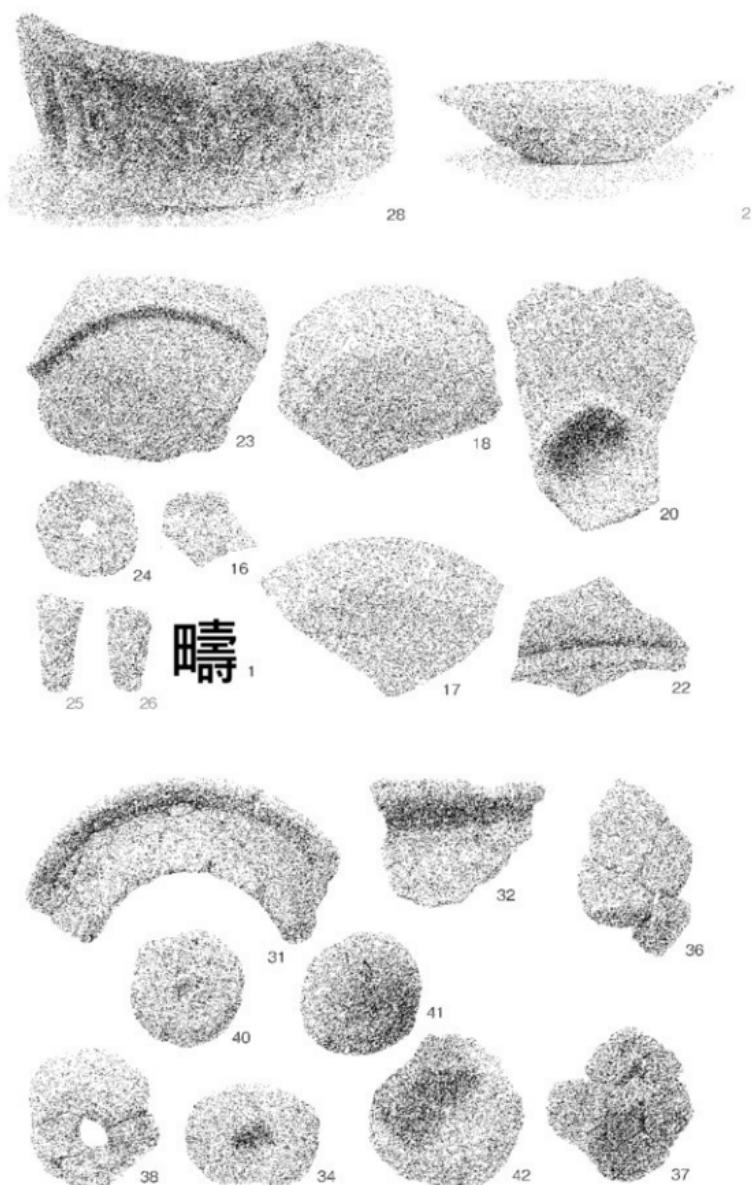
(2) 東側溝 S D08全景（北から）



(3) 西側溝 S D10全景（北から）

長岡京跡右京第932次調査

図版五



出土遺物

長岡京跡右京第948次調査

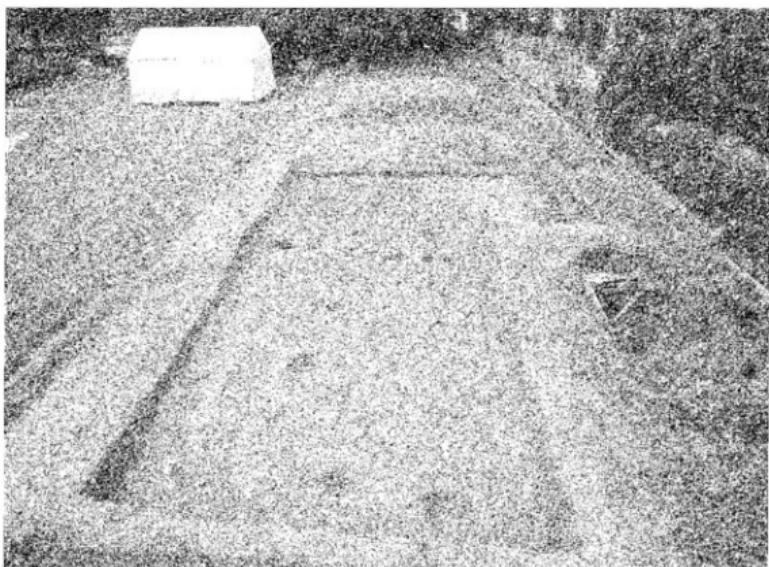
図版
六



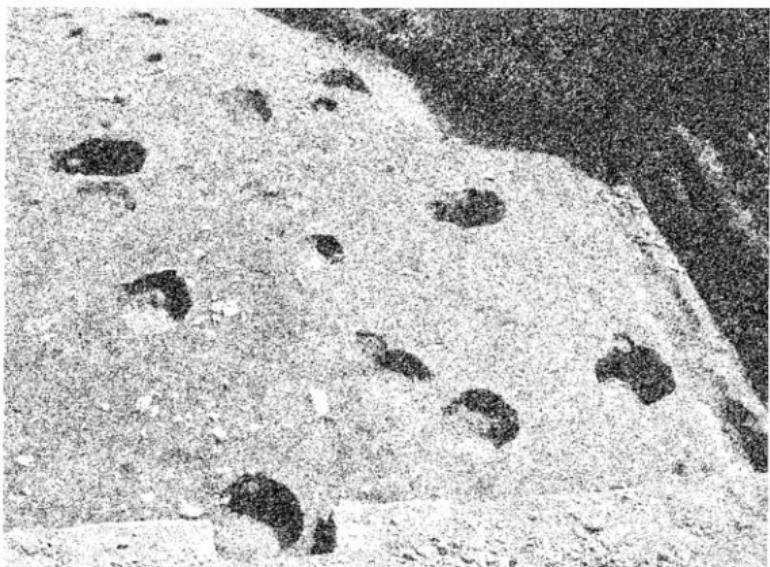
(1) 東調査区全景（北西から）



(2) 西南調査区全景（北から）



(1) 西北調査区全景（北から）



(2) 挖立柱建物 S B 15（北から）

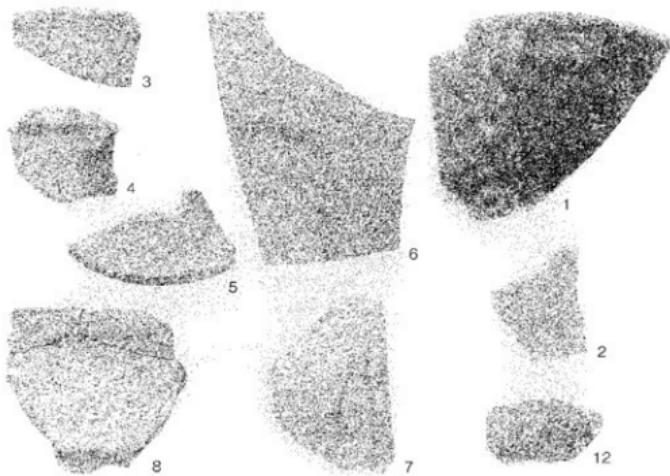
長岡京跡右京第948次調査

図版八



(1) 溝 S D05 (南から)

(2) 出土遺物 - 1



(3) 出土遺物 - 2

長岡京市文化財調査報告書 第53冊

平成21（2009）年3月27日 印刷

平成21（2009）年3月31日 発行

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0851 京都府長岡京市園田一丁目1-1

電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400

印 刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2

電話 075-361-9121 FAX 075-371-0666